

---

# 魔法が世界に現れたワケ

コーラよりファンタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法が世界に現れたワケ

### 【Nコード】

N7732I

### 【作者名】

コーラよりファンタ

### 【あらすじ】

魔法という概念が存在するこの世界にはマドラムという化け物があった。

その化け物に対して少なからず因縁がある青年トオルとその従者。

二人が追うマドラムとは…？そして、因縁とは何なのか？

ハイ・ファンタジー作品です。

## Prologue

この物語の舞台となる場所は魔術や術師という概念が存在する世界。

その世界には、バルテストアント大陸という大陸があり、そこは現在確認できている唯一の大陸でもある。

大陸北東部に存在するハイテスター帝国

大陸中央部に存在するカルタロス帝国

大陸西部に存在するバルク公国

大陸南東部に存在するディバイド地方

主に以上の国や地方で分けられている。

そしてこの物語は、大陸西部に存在するバルク公国の一つの街に居る、とある青年と女性を中心人物として始まる

## Prologue (後書き)

初投稿です。

小説を書くのも初心者と変わりにないので読んでくださった方は

誤字・脱字の指摘はもちろん、感想などを残していつて貰えるとす  
ごく助かります！

## 1 物語が始まり、事件も始まる。

一見すると酒場だろうか、汗臭い男達が屯たむろしている場所に、そこには似合わない上品な雰囲気纏う青年がいた。

「……おっちゃん、それは確かかい？」

「ああ、情報通の俺が言ってるんだ。間違いないさ」

そう言いながら、青年の目の前に座っている 40代ぐらいだろうか おじさんは酒を飲む。

「おっちゃん、飲みすぎだ」

「っへ、これぐらいどうってことねえよ。で？ お前も飲むか？」

完全に、できあがってるな

そう思いながら黒髪の青年は苦笑する。

「……いや、俺はいいよ。おっちゃん、邪魔したな」  
「ひっく。なんでえ、つまらんな」

席を立ち先ほどのおじさんに別れを告げる青年。しかし、おじさんはそれが少し気に入らないのかブツブツと独り言をつぶやいている。青年はそれに気づいていたが何も言わず、酒場を出た。

「それにしても、酒飲みの扱いには相変わらず馴れない」

先ほどまで一人であった青年は、どう考えても独り言ではないトーンで呟く

そして少し間があり トオル様、と少し後ろの方から声が上がった

「ここは酒造場が近いですから、そのような発言は慎んだ方がよろしいかと」

このあたりは酒が名産の為、酒を好んでいる人は多い。

だから、先ほどのトオルの発言はあまり褒められたものではなかったのだ。

「ああ、そうだったな。悪かった、従者」

本当に反省してるのか、とトオルをジロリと見る従者と呼ばれた女性。

髪は薄ら赤く、背は高い。

顔は矯正に整っており、胸も大きめで見るからに包容力にあふれている綺麗な女性　そのせいでしばしば実際の年齢より上に見られることもあるのだが　は、はあとため息をつく

「それより、何か手掛かりは見つかったんですか？」

「信憑性は限りなく低いけど、成果はあったぞ。情報が正しいならおそらくビンゴだろう」

信憑性が低いと言ったのは、トオルが疑り深い性格という事も関係しているが、先ほどのおじさんが見るからに酒に酔っていたことによる。

「確認するには少し中央に向かわないといけないが」

「わかりました、それじゃあ向かいましょうか」

「…情報の中身、気にならないのか？」

「ええ、その事はトオル様に任せていますから」

従者と呼ばれた女性がその情報の中身を聞かずに移動しようとしたのは、トオルを信用してるだけではなく

単に、自分はそのことに関してあまり興味がないという意味も含まれていた。



先ほどの場所から10kmほど離れたところにある街に、トオル達は向かっていた。

そこは、先ほどの平民中心の街ではなく貴族中心の街であった。

平民とは魔術を扱えない家の者をさし、貴族とは魔術を扱える家に生まれた者のことである。

貴族は自分たちの事を魔術師だと名乗っている。しかし平民の中にはあまり貴族にいい印象を抱いていない者が多いので、貴族は平民たちに信仰者と呼ばれていた。

少し歩いて、無事目的地へと着いたトオル達は

「ふう、やっぱりこっちの方が落ち着くな」

「……あちらもあちらで味があつていいとは思いますが、些か治安の問題もありますものね」

この言動で分かる通りトオル達は貴族側　魔術を扱える者たちだった。

そしてトオルは情報収集のため酒場に、従者はこの街の観光へと向かった。

そして一時間が経ち

「……従者。お前また観光してただろ！」

「へ？ ……なんふえわわったんですふあ？」

この街の名物であるフランクフルトを頬張りながらそんなことを従者は言う

こいつ、絶対確信犯だ。

従者の計算高さや腹黒さを身に染みて感じているトオルはそう確信した。

「ん……ふう。おいしかった」

「そりゃあな」

と、むっとした顔でトオルは答える

「それより、何か分かりましたか？」

「ああ、どうやら情報　マドラムが現れたのは本当らしい」

マドラム　それは魔術師を喰うもの。

魔術師の力を喰い、魔術師を狂わせてしまう化け物。

噂ではそう言われている。一般的には都市伝説の類なのだが主人公たちは真面目にコイツを追っているのだ。

先ほど、トオルは情報といったが、酒場のおじさんがトオルに話した内容にマドラムなど一言も出ていなかった。

しかし、それは確実にマドラムの関係する事件なのだと、トオルは考えていた。

「えっと、こちら辺に有名な魔術学園があるらしくてさ。名家の子が集まるそうだ。その学園で不可解な事が起こったらしい。簡潔に言つと、数日の間に二人の生徒が自殺している」

しかし、それだけでは従者も驚くことはない。トオルもこれぐらいなら、おじさんから聞かされたときにドライに聞けはずだ。

「ただ、死に方が異常だったらしい。一人の死体は、目がつぶれて顔中血だらけ、しかも顔に引っかけ傷が多数。自分で引っこ掻いたんだろうな。」

そして残りの一人は自分の喉に手を突っ込んで声帯を引きちぎって死んでいたらしい、それも自分でだ」

「……まあ」

これにはさすがの従者も、少し引いてしまったようだ。ほんの少し顔をしかめた従者はしかしすぐに顔を戻し

「しかし、なぜそれが自殺なんでしょう?」

「ああ、それが俺も不思議なんだ」

トオルたちはそれが魔力暴走　マドラムに喰われた者はそうなる  
によるモノということを知ってるから、確かに二人は自殺した  
という事がわかるのだが

一般的にマドラムは都市伝説、いないとされている。貴族といえども普通の者がマドラムの存在を知っているはずもないのでトオル達は不思議がっていた。

そんな異常な死にかたをしたのだから外部の手が加わっていてもおかしくないと思いは考へるのに今回の場合、自殺と断定されていた。

それは、おかしな事に違いなかった。

「まあでも、俺としてはそんな事はどうでもいい」

「マドラムの事が関わっているならば、些細なことはどうでもいい。」

「トオルはそう考えていた。マドラムの所在さえ掴めれば。中々見つからなかった手掛かりがやっと現れたのだ、と。」

「けど、余裕がないな」

「マドラムが関係していて、すでに二人が襲われている。となると、次の犠牲者が出るのは時間の問題であった」

## 2 謎の少女と狂気の力

トオルは例の事件の犠牲者が通っていた魔術学園の近くへとやって来ていた。

トオルがここに来た理由は一つ。

学園全体の情報を集めるためだった。

マドラムがこの学園の生徒を襲った詳しい理由は分からない、しかし死んだ二人共がこの学園生であったため次の標的もこの学園生である確率が高いだろう。

そして、マドラムに襲われた人間には全員が持っている一つの傾向があった。

傾向とは、襲われた人間は皆が比較的有名な家の者であったという事。

これが示すのは、魔力の高いものが標的にされているということだ。魔力が高い者は名家に多い。

だから学園内で魔力が特に高い者を調べて、その者を手当たりしだ

い監視しておけば、いつかヤツは尻尾を出すはずだ、そうトオルは踏んでいた。

しかし、これはマドラムがトオルの考え通りにこの学園を標的にしてる場合に限っていて、もし別の思惑で二人を殺したのであれば次の標的の絞りようが無い。

これは一種の賭けであったが、こうするしかトオルには思いつかなかった。

そして、学園の門前についたトオルは

「ま、予想してた通りか」

無意味に大きな学園の門を一瞥し、トオルは呟く。

門の前と中には警備中の男が併せて5人。学園は嚴重に警備されていた。

そして時計を確認するトオル。

現在時刻は小さな針が3を指し、大きな針が6を指している所であった

「出てくるのを待つか…」

トオルは一度、学園に直接話を聞こうかとも考えた。しかし、学園側に『誰がこの学園で一番強いんですか？』なんて聞いて、答えを教えてくださいがなかった。だから、学園内事情を知っていて、口の軽いであろう学生に聞くことにしたのだ。

時刻が4時になった頃  
ぞろぞろと学園生が門から出てきていた。

しかし、トオルは中々情報を得れずにいた。というのも、さすが名門と言わんばかりに一人ひとりの学生に高級車の送迎はもちろん、ボディガードのような者がついてる者も居て、とても話が聞ける状態ではなかったのだ。

そして、先ほどから警備員の人間からの視線が痛い。

さすがにウロウロしすぎたか？  
もう、かれこれ30分ぐらい門の前でウロウロしていたので怪しまれても仕方が無かった。

ここで目立ちすぎて目をつけられるのも困る。そう考えたトオルは、聞き込みの場所を変えるために移動しようとした。

しかし、その刹那



「なに」

背後の学園の方で強大な異質な力を感じたトオルはすぐさま振り向き、啞然とした。

「あれは」

あれは、まさか。

振り返ったトオルは、普段では決してみる事のないモノを目にした。

「狂気…」

狂気、それは。

マドラムに喰われた人間が一時的に身につける力。

それは人を狂わす魔性の力でもある。その力は術者も例外ではなく狂わせてしまう。

マドラムに襲われた人間が狂ってしまうのはその力のせいであった

その狂気を、膨大な量の力を、身に纏っている人間が、そこにいた。それが意味するのは、マドラムはすでに三人目の犠牲者を出していたということだ。

「  
」

トオルは少なからず驚いていた。

すでに被害者が出ていたことに関しては勿論のこと、それ以外にもあれほどの量の狂気を目の前の人間　少女は纏いながらも普通に生活しているように見えた。

そんな事は普通あり得ないのだが、彼女はとても狂気に侵されているようには見えないほどに社会に溶け込んでいたのだ。

と、驚いてる間にも例の彼女は学園の外から出てこようとしている。どうしたものかと考えを巡らし、瞬時に一つの結論をだす。

## 2 謎の少女と狂気の力(後書き)

当方は一日一回、小説を更新するのを目標としているため一日で書けた分だけ投稿していきます。

そのため一話の長さが短かったり、最後がブツ切りになったりすることがありますがご容赦ください。 > m ( | m <

### 3 予期せぬ腕前

一人の少女を尾行する一人の青年。

こう言われて連想するのは良くて探偵、悪ければストーカーだ。

今の青年 トオルがしているのはどちらかと言えばストーカーに近い。

彼は何かに惹かれるように彼女を、そして彼女の狂気を追っていた。

彼女はどうかやら1人らしい。あの学園生にしては珍しい事なのだが付き人の一人も見えない。

1人？

そういえば、とトオルは思い出す。

「…従者のヤツ、いつのまにかいないな」

たしか、あの学園に着く途中までは一緒だったような。学園前に着いた時にはすでに従者はいなくなっていた。

本来なら従者としてあるまじき行為なのだろうが、二人の関係は本来の主人と使いのそれとはかけ離れていた。だから、トオルもそれを咎めることはない。

咎めることはないのだが、従者がどこにいったのかはいつも気になっっている。

彼女はよくいなくなる。いなくてもいい時にはいつも居るくせにこういう大事な時にはいつもいないのだ。

まるで埃のよう。

周りにフワフワと舞っていながらも、掴もうとすると離れて行ってしまっ。

ごくごく有触れた表現だったが、トオルにはその例えしか思いつかなかった。

その時、尾行していた少女が、大通りを抜けて小さな路地の方へ入って行った。

チャンスだ！

トオルは思い切り地を蹴り、彼女が消えた路地の方へ走った。

尾行していたのは、二人きりになるチャンスを窺っていたためだ。彼女が急に路地裏に消えた理由は分からないが、これは好機であった。

そしてトオルが路地裏の方へ入り、彼女が歩いて行ったであろう方

向を見ようとした

「な」

瞬間、トオルの首筋には白く光る鋭利な刃物が突き付けられていた。

「何者ですか、貴方は」

目の前の少女　近くで見ると結構な美人だ　はトオルを睨みながらこう続ける

「先ほどから私をつけていたように思いましたが？」

警戒心と鋭い目付きを崩さずに彼女は問い詰める。

「い、いや　少し話したい事があったさ。…その前にソレ、下ろしてくれないか？」

言いながら刃物を一瞥する。

「名前は？」

「クスノキトオル  
楠木竜だ」

トオルに突き付けた刃物を彼女はスツと下ろす。

「はあ……」

一気に脱力してしまう。いきなり刃物を突きつけられるとは思ってもしなかった。

もともとトオルとしては、尾行がバレることは想像の範囲内だった。目の前の少女も名家の子なのだ、それなりに実力はあるはず。けど、まさかこんな強引な方法を取ってくるとは思ってもしなかったのだ。

でも先ほどの、刃物の軌道。…まったく見えなかったな。動体視力には少々自身があったのだが。

「それで、話とはなんだ」

「……、その前に君の名前を教えてもらえないか？」

「なぜお前に私が名乗らなければならぬ？」

「ごもつとも。おかしな話だけど、俺が彼女の立場だったら絶対に名乗らないだろうな。」

「だけど、その…あー…、えっと」

頬を掻きながらトオルは言い淀む。

「なんだ」

「えっと、…いや、信じてもらえないかもしれないけど」

「こじで少し溜め」

「……俺、君の事が好きなんだ！」

「は？」

叫ぶトオル、啞然とする少女。

「いや…、散歩していたら丁度…学園から出てきた君の事を見かけてさ。…その、一目惚れってやつかな」

顔を俯かせながらボソボソと呟くトオル。



後半の声は目の前にいる彼女にさえ聞こえたかどうか分からないほど小さな声になっていた。

「それで、思わず君の事追っかけてきちゃって、その…」

言いながらトオルが顔を上げると　今度は彼女が顔を俯かせてしまった。

「な、な、な、」

地面を見ながら呟く。

わ、わたしのことが好き？

彼女は混乱していた。

急に尾行され、何らかの危機を感じたから路地裏に引き込み、問い詰めたら目の前の男は自分の事を見て一目惚れしたと言っている。あまりにも急な事だったという理由もあるが彼女は今まで男の人に告白されたことなどなかった、そのため余計に混乱していた。

その少女の混乱をトオルは知ってか知らずかこう続ける。

「だから、君の名前を覚えてほしいんだ」

好きになった人の名前を知りたくなるのは当たり前のことだろ？  
と、付け加えて。

このときのトオルの雰囲気は、先ほどのトオルとは違った者、殆ど別人のようであったが混乱している少女がそれに気づくことはなかった。

#### 4 路地裏く作戦決行前夜

「わ、私は、コウエンジミサト高円寺京だ」

そう、俺の目の前に居る彼女は名乗った。

トオルの演技が効いたのだろうか、今でも少しは残っているものの刃物を突き付けられていた時に比べると彼女の警戒心はだいぶ少なくなっていた。

「そっか、ミサトか…」

違和感のない様に名前の方を口に出したが、トオルにとって大事なのは苗字の方だった。

有名な家ならば調べればすぐに素性がわかる。

偽名の可能性はもちろんあったが、彼女の様子を見る限りその心配は無用のようであった。

それに、貴族は元々自分の家の名前を出すことに基本、抵抗が無いはずだった。

貴族は世で有名になればなるほどいい、と考えられているからだ。有名な貴族が皆、名家と言われる所以はそこにあった。

しかし、さすがに見ず知らずの自分、しかもストーリーカーをして

いた者に容易く名前を教えるのはどうかと思うが。まるで他人事のようにトオルは考えてしまう。

地面の方を見つめながら考え事をしていたトオルは、ふと彼女の方を向くと

「えと…で… …あ……うー……」

顔を赤くして何か独り言を言っていた。トオルにはあまり聞き取れなかったが、恐らく言葉として成り立っていない言葉を発している事はわかった。

けどこれ以上、ここにいる必要はないか。

トオルにとって最も聞きたかった事というのは、名前だった。相手の名前が聞けた今、ここに留まる理由はない。後は適当に理由を付けてここから離れるだけだった。

「え、えつと…」

「あ、まずい！ …悪いんだけど、仕事の帰りだったんだ。早く帰らないと嫁さんに怒られる！」

咄嗟に思いついた言葉がこれだった。もちろん全て嘘である。

「え、あ、ああ。わかった…？」

トオルの勢いに半ば巻き込まれ、京は思わず返事してしまった。そして、京の返答を聞いて満足したトオルは早足で路地からでてしまった。

嫁？

先ほどのトオルの言葉を思い出す。

「よめ？ …よめ。よめー。ヨメ…。 嫁！？」

そこで京はまたしても混乱してしまう。トオルにとってはどうでもいい、何の意味もない言葉だったのだが。

私は、浮気相手候補？

京の出した結論は自分自身を余計混乱させる言葉となってしまうた。

京がそう混乱している中、トオルは路地をすでにでて大通りを歩き、考えを巡らしていた。

理由は分からないが、マドラムは先ほどの彼女を喰うのに手こずっているらしい。

ヤツが喰い終わると喰われた者は狂って死んでしまう。しかし、彼女はまだ死んでいなかった。

マドラムは昼夜問わず人を 魔術師を襲うのだが、基本的に夜にしか襲わない。

皆が寝静まった夜に、音もたてず貪り喰うのだ。だから喰われている本人はそれに気がつかない

だから、マドラムを仕留めるには夜まで待つ必要があった。

「うーん、夜になるまで何をするか…」

まずは、従者にこの事を話して。その後に戦うための準備。あとは適当に時間潰してりゃいいか。  
けどアイツ、従者は何処に行っているのか。…恐らく、この街にはまだ来たばかりだったから観光してるんだろう。

一瞬探そうかとトオルは考えたがやめておいた。

「あいつは自由だから…。すぐ戻ってくるし」

ヤツを仕留めに行く段取りを始めるまで後　6時間ぐらいある。  
それまでには帰ってくるだろう。そう考えたのだ。

そして、従者が帰ってきたのはこれから4時間と少し後の事であった

「なあ、いったいこんな時間まで何してたんだ？　いや、寧ろどうやってここまで時間をつぶしてきた？」

「あら……詮索するなんて珍しい」

「あんな。もう9時だぞ？　流石に気にする」

「ん？　…ははん。さては私の事を心配してくれてるんですね？」

「ああ」

「…私が求めてた回答と違います」

どうしろってんだ。

「もっと……ごう……！ 『そ、そんなじゃねーよ！』とか、『そ、そんなじゃないんだからね！』とかあるでしょう」  
「……………」

「…それより、さっき言った事覚えてるだろうか？」

トオルは無視して話題を変える。

「ええ、それはもう。『君の事が好きだ』とか『君の名前を教えてください』とかですよ？」

「き、聞いてやがったのか！」

「従者たるもの当然の責務です」

「じゃ、じゃあその後はどこに」

「勿論、観光です」

とても素早い返事だった。

頭が痛い。

何処から突っ込めばいいのか。そんな事を考えるのも億劫なほどトオルは呆れていた。

だから、この件に関しては全部スルーする方向に決めたのだった。

「……話を戻すけど。俺がお前に確認したのは今日の作戦の事だ」  
「ああ、そっちでしたか。勿論覚えてますよ」

「なら、いい。今日は俺の言ったとおりに動いてくれ」  
「了解いたしました」

ふざける事は多いが真面目な時にはしっかりと仕事をこなすヤツ。

トオルはそう、従者の事を評価している。

その点でだけ言えば、二人の関係は主と従者というより雇用主と傭兵と言った方が近かっただろうか。

作戦決行まで後2時間

それまでトオルは柔軟体操や、作戦の確認などを行い、従者はテレビを見ながらお菓子を食べてダラダラと時間を潰すのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7732i/>

---

魔法が世界に現れたワケ

2010年10月8日23時47分発行